が、私たち大人のただ一つの尊い仕事とつくづく考える次第です。

もう一度白秋の言葉を思い出して見ましょう。詩の心とは森羅万象、生きとし生けるものの生命をあわれみ、尊び愛すること、そしてそれは神に通じる心〃とありますが、この神に通じる心こそ、うたの心であり、それはまた生きとし生きるものへの神の愛を知ったものの、静かな祈りではないでしょうか。私たちは何とかして幼い子どもたちの心にこの神の愛を感じさせたいと心から願うものです。

神様はのきの小雀まで
おやさしくいつも守り給う
小さいものをもお恵みある
神様わたしを愛し給う
野辺の花、小鳥、よろずのもの
お作りになりて愛し給う
小さいものをおめぐみある
神様わたしを愛し給う

子どものころよく歌っていたうたです。こんなうたをお母様がご一緒に歌ってくだったら、子どもたちはどんなに幸福でしょう。

（声楽家）

七月のうた

今、〃七月のうた〃というと、多分皆さんは〃ささのはさらさら　軒ばにゆれる〃という〃七夕さま〃の歌を思い浮かべる方が多いのではないでしょうか。毎回どうも古いことばかり申し上げておはずかしいのですが、私が思い出すのは、〃水鉄砲〃なのです。水をくんできて、水鉄砲で、シュッシュッと水をかけあう。歌いながら、遊戯をしながら、本当に水がからだにかかるような気持ちになったものです。およそ単純なメロディー、リズムですが、それだけにすぐ覚えたのかもしません。そしてこれを歌うたびに、もうなくなられた幼稚園時代の恩師、新庄よし子先生の、お元気な大きなお声、着物にはかまというお姿で子どもたちと一緒にお遊戯をなさっていたお姿が、ハッキリと目の前に浮かぶのです。そして当時、私が家へ帰ってして見せた遊戯を、私の母はちゃんと覚えていて、今、自分のひ孫に教えているのです。

（赤間　峰子）